

## 豊後大友氏の研究史的考察

芥川, 龍男 / AKUTAGAWA, Tatsuo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

1997-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011252>

## 豊後大友氏の研究史的考察

芥川龍男

はじめに

本稿は、筆者の大友氏研究に関する軌跡を明らかにすることを主要な目的としている。したがって、表題の「研究史的考察」とは、いわば「自分史」を研究生活の側面から考察したものということにもなる。

戦後の学界の変貌・展開はまことに目まぐるしいものであった。論点としては「封建制」に関する諸論争が主流を占めた。日本の封建制について種々の観点から分析を加える動きが活発となり、その手法も社会経済史的方法論が盛行した。

このような論点と方法論の発展の中で、近世史料とくに地方文書の発掘調査が盛んとなり、その成果が自治体史の編纂・刊行があいつぐ状況となり、編纂事業の伸展の中で多くの史料が発見されることにもなった。このような傾向は、従来「郷土史」から日本歴史の全体像の一部としての「地方史」としての研究を促すことになった（近来は「地域史」という観点で見直されていることは周知のごとくである）。

筆者が「豊後大友氏研究」を志向し始めた時期は、まさに右に見た状況のさなかであった。自治体史の編纂・刊行、史料集の編纂・刊行、史料探訪などいずれも進行中であり、専攻する研究業績も体系的なものはなく、先導する研究者も見当らなかった。したがって、当然のことながら筆者の稚拙な学力をもって切り開いていかねばならない状況におかれてい

た。しかしながら、四十余年の年月は未知は未知なりにはのかな道筋を明らかにすることができた。以下において、その概略を述べることにしたい。なお以下の文中で「大友宗麟」は「宗麟」の呼び名で統一したい。ちなみに、はじめは「義鎮」と称し、天正五年（一五六一）に剃髪して「瑞峰宗麟」と称した。

### 豊後大友氏研究の動機

#### (1) キリシタン大名大友宗麟（義鎮）

筆者の歴史研究の最初の関心はいわゆるキリシタン大名についてであった。キリシタン大名という範疇での論著は戦前戦後を通じて極めて多いにもかかわらず、中世末期＝戦国期の日本の動向の中での位置付けについては不十分というよりも欠如していたといわねばならない。例えば日本におけるキリスト教の発展過程についての詳細な研究である姉崎正治『切支丹伝道の興廢』に代表される一連の業績がそれである。その影響であろうか「キリシタン大名」の名辞は周知のものとなっていたが、守護大名から戦国大名への成長過程において、キリシタンとなることまたはキリシタンであることがいかなる意味を持ったかなどの研究視角はなかった。筆者の最初に抱いた疑問はまさにこの点にあった。周知のように、戦国期の九州におけるキリシタン大名として大村純忠・大友宗麟・有馬晴信の名が知られている。中でも大友宗麟は、日本にキリスト教布教の第一歩を記したフランシスコ・ザビエルに積極的に接触し、領内に布教の許可を与えたのは天文二〇年（一五五一）八月（その前年二月にいわゆる「二階崩れの変」があり、父義鑑は重傷に倒れたが死の直前に、宗麟はかろうじて大友氏二一代の家督を継いだ）で、その年末にインドに帰らねばならなかったザビエルに使者を付して、インド総督に宣教師の派遣方を懇請した。以後豊後の府内城下がキリシタン布教の拠点となるのである。このように最も早くからキリスト教に対する理解を示したにもかかわらず、大友宗麟自身の受洗には疑問が残るのである（幸田成友『日歐通交史』・『耶穌会士日本通信』・拙著『豊後大友氏』等）。

しかるに肥前の大村純忠の場合、洗礼を受けたのは永祿六年（一五六三）であるが、大友宗麟は天正六年（一五七八）であり、一五年の差が見られる。ザビエルと会ってから二七年の年月を経過しているのである。この差はいったい何を意

味しているのか、豊後大友氏研究の最初の問題点はここにあった。宗麟はもちろん、大村・有馬ともに九州における戦国期の大名であり、のちには「天正少年遣欧使節」に関連するのであるが、使節の派遣については、三大名が直接派遣したごとく一般には理解されているが、必ずしもそうではない（松田毅一『天正少年使節』△角川新書▽参照）。キリシタン大名としての重要な受洗の時期については右に見たような相違が見られるのである。したがって、戦国期の九州において、彼らがキリシタンとなることがいかなる意味を持ったのか一考を要するのである。

## (2) 受洗による効用

受洗による効用とそれを期待せざるを得なかった事情として考えられることは、戦国期の九州の情勢であるが、その前提として古代以来の九州のおかれた歴史地理的特性を理解しておかねばならない。九州の地が古代以来の海外交渉（主に朝鮮半島・中国大陸の諸国など）の玄関口であることは周知の事実であるが、中世において西北九州（筑前・肥前など）における松浦水軍をはじめとする倭寇の事実が、東アジアの各地との絶えざる私貿易が展開していたことを如実に物語っている。室町幕府三代將軍足利義満によって再開された公貿易ともいえる日明貿易のもとにあっても、このような私貿易は絶えることなく続いたものと理解される。それは西北九州のみならず、肥後・薩摩に至る九州西岸一帯はいたるところ入り江と多数の島が散在するとともに、海流の関係からも東アジア諸国船の漂着・私的な来航が頻繁であったと推察されるのである。このような状況の中で、インドに総督と布教の拠点が形成され、マカオまで来ていたポルトガル船が日本の一角にたどり着く必然性は整っていたのである（岡本良知『一六世紀日欧交通史の研究』）。

いっぽう日本におけるキリスト教布教の拠点も、豊後のみならず肥前の平戸における松浦鎮信のもとで発展を遂げ、ポルトガル船の平戸来航が見られるようになった。当時ポルトガル船は寄港地選定の条件として、ミサをあげることのできるキリスト教会がなければならなかった。松浦鎮信は平戸港とキリシタンの保護により見事にポルトガル船の来航と交易の便を得たのである。

この時点から肥前大村の領主大村純忠のキリシタンとポルトガル船に対する関心が強まってくるのである。松浦氏のみ

ならず、大村領の東に接する肥前竜造寺氏もしばしば大村領をうかがっていた。このようなはさみ撃ちにも近い状況のもとにおいて、大村氏はポルトガル船の寄港と交易により、特に鉄砲などの火器に必要な塩硝の入手が必要であった。そのためにもキリスト教会と宣教師らの拠点として横瀬浦の開港・長崎開港とあいつぎ、同族である島原領の有馬氏のもとにおいても教会・セミナリオなどがあいついで開設されるようになった。大村純忠の受洗はこのような状況の中で、つまり領国維持の打開策という面が強くうかがわれ、まさにキリシタンになる(受洗)ことによる効用を期したといえるのである(渡江小摩策「純忠時代大村に於ける耶穌教及貿易」『史学雑誌』七編二二号、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』西九州編)。

このような西九州の地を拠点としていた大村氏のみならず、松浦・有馬氏などの場合と東九州の豊後を領国としていた大友氏の場合は事情が異なっていた。たしかに日本に於ける最初のキリシタン布教の拠点となった感があるが、右に見たように平戸・島原がポルトガル船の寄港地とセットで発展を遂げたのに比して、九州の南端薩摩を巡って日向・豊後まで来航することは極めてまれなことであった。このような地理的位置のみならず、豊後に接する豊前・筑前の博多の掌握をめぐる長門・周防の大内氏との間に於ける攻防があいついでいた。したがって、大友氏の領国においては、キリスト教の布教とポルトガル船の来航がセットになる諸条件が整っていなかった。それのみならず、大友氏自体分国経営に奔走せざるを得なかった。宗麟は父義鑑のあとを受けて鋭意支配権の拡大につとめ、永禄二年(一五五九)には將軍義輝から豊前・筑前・筑後守護職に補任され、ここに九州のうち六か国守護職を手に入れて九州の雄となったのである(拙著『豊後大友氏』)。およそこのような事情が宗麟自身の受洗を遅らせた最大の理由であった。

宗麟は天正六年(一五七八)七月、神父カブラルによって洗礼を受け、教名をドン・フランシスコと称した。このいきさは前掲『フロイス 日本史』には次のごとく述べられている。

「神の教えが日本に伝えられた当初から、自分にふさわしいものと思われ、胸中では良いものと思いつつも、キリシタンにならずに今日に至ったのは二つの理由がある。

一つには、なかなかその機会もなく、また機会を作るのも容易ではなかったが、嫡子義統も成人し、領国支配を委ね

ることができ、自分のことを考える時間をもてるようになったこと。第二の理由は、自分（宗麟）は、日本の宗教の真髓を知りたいと念願し、禅宗こそ日本仏教の基本をなすものであり、禅を理解すればその目的が果たせると思い、莫大な費用をかけて禅寺院（寿林寺であろう）を建立し、学僧（怡雲宗悦）を招いて観想（座禅）に励んだが不安のみ募り、得ることがないのに気がついた。そこで洗礼を受けることを決意した」（文中（ ）の部分は筆者の注記）。宗麟が洗礼を受けるに至った心境がくまなく紹介されているが、これも松田毅一氏の長年にわたる探究の結果はぼその全貌が明らかになった『フロイス 日本史』の翻訳・刊行によって知ることができたのである。なお宗麟の受洗前後の事情等については拙稿「宗麟の生涯―その転機―」（筆者編『大友宗麟のすべて』所収）においてすでに触れたので省略したい。大略このような事情を明らかにし得たのには、『増補訂正編年大友史料』をはじめとする関係史料集の編纂・刊行に負うところが多かった。

### (3) 田北学先生との出会い

筆者が大友氏研究を主題とするようになった契機は田北学先生との出会いにあった。大友氏に関して筆者が最初に手にしたのは、先生の編纂になる『大友史料』第壹・弐輯と『編年大友史料』正和以前・自正和二年至正平六年の全四冊であった。これらを手に入れてはじめに『大友史料』第壹・弐集の人名索引を作成して、上梓した段階で先生に進呈した。これが契機となって何回となく大分市上野が丘の御宅に参上してご指導を受けることになった（昭和三〇年代後半）。当時先生は年来の課題であった『増補訂正編年大友史料』編集の最終段階に到達され、身辺にはその原稿と、文書写真の入った書棚のみという、研ぎ澄まされたように整理された環境の中で、夫人とお二人の静かな生活を営まれていた。御宅は大分駅を出て間もなくのトンネルの上に位置していたが、列車の響きも伝わらず静かなものであった。お庭から左手には大分川が遡行し、右手には豊後国府跡が遠望され、まさに戦国期大友氏の拠点府内の周辺が一望できる好適な位置にあった。先生がこの地を選ばれたのもむべなるかなと痛感した。

先生は大分高商（現大分大学経済学部）創立以来商業英語担当の教授であったが、御自分の家が、御自分の家が、大友氏庶家の田北氏の

流れをくむことから、田北氏さらに大友氏の研究を発意され、そのためには大友関係史料収集・調査の必要性を痛感されて、以後県内はもちろん近県の古文書所蔵家の歴訪と調査、東大史料編纂所における調査に取り組まれ、戦前に一部を公刊したものの戦時中のため中絶せざるを得なかった。戦後になってそれらの成果を整理し、『増補訂正編年大友史料』として刊行する段階に到達されていたのである。

先生の御宅に滞在して御指導を受けることになった。その間『大友史料』編纂を意図された動機から集大成に至る経過を克明に語られ、文書写真による解読の御指導の合間にも「大友史料を収集して思うのは、これは単なる大友一族の歴史にとどまらず、日本の中世全体にかかわる研究になる。この点を忘れずに頑張ってほしい」と繰り返し語られた。また研究上のテーマも次から次に提示され、臨地研究の必要性・花押の重視など多くの示唆を与えられたのである（拙稿「大友史料」『国史大辞典』2巻所収、「歴史と私」『歴史手帖』第一六巻四号所収）。

### 研究経過と方法論

#### (1) 大友氏関係史料の調査

前記『増補訂正編年大友史料』の編纂からやや遅れて『大分県史料』の編纂刊行が始められた。これは県内文書を地域別・所蔵家別に編纂されており編年体ではないが、古代末期から近世にわたる広範なものである（この成果が県内未見文書を明らかにしたこととともに、『大分県史』編纂刊行の基盤になった）。関連して、ほぼ同時期に近県の佐賀県・熊本県においても史料集刊行がはじめられた。いずれも戦国期の大友氏の分国であった地域である（拙稿「西国武士団関係史料（古文書）の収集と調査」『私学研修』一一七号所収）。

筆者の史料調査は、田北先生の教示された大分県・福岡県における文書所蔵家の歴訪と文書調査からはじめた。三〇年前の当時は、いずこにおいても史料採訪の処女地の感があった。どこの御宅においても快く拝見することができ、いわゆる生の古文書に触れる感激の連続であった。採訪したのは県立大分図書館・県立福岡図書館・九州大学文学部国史研究室・九州大学文化施設九州文化史研究所・北九州市立図書館・臼杵市立図書館等のほか、個人所蔵文書としては日田市の草

野文書・帆足文書、筑後（福岡県浮羽町）の河原文書、柳川市の立花文書・米多比文書などであるが、カメラ・フィルムさらに筆者の技術すべてが今日とは異なり、写真撮影とともに筆写も並行して行った。この一連の調査は、その後も種々の縁から拡大する一方で、その全貌を記する余裕はないが、文書の実見とともにその折のヒヤリングと地域に対する理解が深まったことは計り知れないものがある。

## (2) 臨地研究と文書調査

### 一、鎌倉（大友屋敷跡）

前掲『増補訂正編年大友史料』の中で唯一の図版に、大友氏の始祖大友能直の鎌倉における屋敷跡の図がある。現鎌倉市扇ヶ谷三丁目（古くは龜ヶ谷のうち）の一角にある谷戸がそれである。『増補訂正編年大友史料』の編者田北氏が戦前に調査して以後の確認調査ということになる。田北氏の調査の時点では、「大友」という字名があり、それに接した墓地に「大友稲荷」と呼ばれる石祠があった。これらは能直が中原親能から譲られたもので、「大友」は大友屋敷の跡。「大友稲荷」付近は大友氏の墓地であろうという状態であった。

筆者が調査したころ（二〇余年前）も景観に大きな変化は見られなかった。谷戸の奥まった「大友稲荷」を含む部分は某氏の宅地になっており、大半が茂るにまかせた樹木と下草に覆われ、細い流れが何本か見られるところから湧水がにじみ出ているようであった。某氏にうかがったところでは、敷地内から古瓦が出土し、石碑らしきものの破片も出るとのことである（渡辺澄夫『大分の歴史』3・大分合同新聞社刊）。

### 二、相模大友郷（大友氏本貫の地）

すでに史料上では大友氏の本貫の地であることは知られていたが、現在地の比定は全くなされていなかった所である（『吾妻鏡』・『増補訂正編年大友史料』・牧健二『日本封建制の研究』）。現在地は神奈川県小田原市東大友・西大友・延清を含む一帯が大友郷の範囲と推定できる。小田原の東方に広がる酒匂川の氾濫原のうち、等高線二〇～二五メートルを示す扇端部に位置する微高地である。東方には曾我の地を抱え込むようにゆるぎ山塊が連なり、西方遙かに箱根連山の見え

る地であり、鎌倉時代の旅行記『東関紀行』によれば、西大友から東大友を通り、曾我に至る道筋にあたっていたらしい。筆者がこの地を訪れた（昭和四七年春）ころは、これらの集落は深い木立に囲まれ、酒匂川から引いた分水と堰が網の目のように走っていた。東大友の長善寺周辺には水田がめぐっているがいわゆる深田である。筆者はまず長善寺に行き、老婦人から聞き取りを始めた、筆者の求めに応じて『昔時過去簿』（過去帳）が持ち出され、それを拝見していると、なかから折りたたまれた古文書が出てきた、二通の後北条氏発給の虎之印判である（現在は小田原市立図書館に寄託されている）。

このような調査から、この地がいわゆる大友郷であり、東大友の地は能直本貫の拠点であったことは疑いないものとなった（拙稿『豊後大友氏と相模大友郷』『日本歴史』二八七号、拙著『豊後大友氏』新人物往来社刊、同『豊後大友一族』新人物往来社刊）。

### 三、上野利根庄

現在の群馬県利根郡川場村一帯が利根庄と比定できる。この地は大友氏始祖能直当時から所領であり、能直の次男親秀が別称「利根二郎」を称していることから、伝領についての片鱗はうかがえるが、史料的には南北朝までの間の事情は不明である。現在村内には吉祥寺・桂昌寺などが存在し、村史においても克明に大友氏との関係が述べられている（川場村の歴史と文化）。これらを手がかりに現地調査を試みた結果次の成果を得ることができた。大友氏七代の当主大友氏泰は延元二年（一一三三）禅僧中巖円月に請うて大友氏祖先墳墓の地である鎌倉藤ヶ谷に住せしめ、同四年冬には、父貞宗具簡の供養のため上野利根庄に吉祥寺を創建し、中巖を開山とした。また氏泰の兄即宗和尚は吉祥寺長老となつている。寺域は川場村の西部の字門前の南面した谷戸一帯である。谷奥に従って緩やかな登り道の参道となり、両脇には樹齢の古い杉の大木がそびえている。いくつかの切り株は四・五百年の年輪を示している。谷戸の最奥に本堂と、向かって左に経蔵、右手に鐘樓・庫裡という配置の伽藍である。

住職高木宗監氏の面晤を得て諸史料を拝見することができた。本堂須弥壇には大友氏歴代の位牌が安置され、中巖円月著の『東海一漚集』が所蔵されている。古文書は文和三年（一一三四）七月二四日付けの、大友氏時による寺領寄進状

(軸装) が所蔵されている。紛れもない正本である。まさに大友氏とのゆかりを証明するものである。吉祥寺について、村内の字谷地の桂昌寺を訪れた。吉祥寺の東方数百メートルの河岸段丘上にある。当寺の開山は、吉祥寺三代の住職萬像機一和尚(応永三年九月三日―一三九六没)とされ、寺域は大友館の跡と伝承されている。それを思わせるように、地域も平坦地であり、周囲には土塁の名残がめぐり、水田とそれに連なる集落の角地であり、面積およそ一町五反程度と見受けられた。境内の一角には、大友氏時と夫人の供養塔と思われる宝篋印塔二基が設置されている。

また大友氏時にまつわる伝承もある(この裏付けの検討は今後の問題である)。大友氏の諸系図によれば、始祖大友能直の次男親秀が「利根二郎」と称していること、親秀の次男重秀もやはり最初は「利根二郎」と称していたこと、また能直の母は「利根の局」と称していたのである。とくに注意すべきは大友氏時の末子氏能は「利根六郎、上野国利根居住有子孫」(常楽寺本大友系図『増補訂正編年大友史料』所収)とあることから、「大友館」の伝承も故なしといえることを実感した(前掲『川場村の歴史と文化』、拙著『豊後大友一族』)。右に見た吉祥寺・桂昌寺のある利根庄―川場村は、大友氏が南北朝動乱期において足利方として行動したことにより、大友氏の起源にかかわる東国の故地を回復することができ、これによって一族の連続性を示す精神的拠点としたものといえよう。これと同類と思われるものに、相模国長坂郷と無量寿寺の問題がある。

#### 四、相模長坂郷と無量寿寺

暦応元年(延元三年―一三三八)十月に、大友氏七代の氏泰は父貞宗の遺志を継いで、鎌倉の浄智寺にいた竺仙に請うて三浦「長坂山無量寿寺」の開山とした(『竺仙録』)。「長坂山」とは長坂郷に関連性ありと推察したことからはじめて数回の調査を行った。長坂郷は現在の横須賀市長坂に比定される。ここは三浦半島西南の沿岸部に位置し、北に大楠山、西に芦名、東南は大田和、東は小田和湾を経て長井の地に接している。長坂郷については、貞治二年(一三六三)二月の「大友氏時当知行散在所領諸職注進状」と、永徳三年(一三八三)七月「大友親世当知行国々散在所領諸職注進状」の二点の史料に見出される。『新編相模国風土記稿』のうち長坂村の項では「無量寺 金剛山長寿院と号す。浄土宗……開基は和田左衛門尉義盛と云伝ふ……」とあるが、現無量寺にある過去帳により寛文九年(一六六九)に火災にあっているこ

などもあり、前掲史料とは直接結びつかない。しかし『笠仙録』には律宗を改め禅宗に改めたこと、さらに大改修工事の有様を記した部分を描写、さらに現無量寺境内を寺地と称することからはじまり、その東に隣接して、北から小峰・下ノ山・長坂・宮ノ前などの小字名が残っている。宮ノ前には祖母岳神社があり、無量寺と相対する位置にある。

以上の現地調査から長坂郷と無量寿寺（現無量寺）を確認することができた。なお長坂郷の地においては、先の利根郷に比して、大友氏との関係を示す伝承すら皆無であることはいかなることか、無量寺の火災もさることながら、戦国期において後北条氏の勢力下に入ったことと近世を経過する中で大友氏との関係が断絶した、つまり長坂郷を含む関東及び相模の置かれた歴史的環境の変化が最大の理由と推察される。この点は今後究明すべき課題であろう（拙稿「豊後大友氏と相模長坂郷」『日本歴史』三三四号、拙著『豊後大友一族』）。

##### 五、豊後国（大分県）玖珠郡の集中調査

玖珠郡は豊後国西北部にあり、さらに西北に隣接する日田郡を経由して筑後国に接している。玖珠郡・日田郡ともに盆地であるが、とくに玖珠郡の景観は周囲が休火山に囲まれ、その山谷は極めて特異なものである。まさに玖珠・日田両郡ともに小宇宙を形成しているのである。玖珠郡には、古代末期以来豊後清原氏一族（長野・小田・魚返・野上・帆足等の諸家）の拠点としてその一族が郡内一帯に広がりを見せた所であり、『弘安岡田帳』などにこれら諸家の名が見られる。戦国期にはこれら諸家がいわゆる「玖珠郡衆」として大友氏に把握されたのである。玖珠郡衆については拙稿「玖珠郡衆の一考察——野上氏を中心として——」（渡辺澄夫先生古稀記念事業会編『九州中世社会の研究』所収）において触れたので省略し、玖珠郡一帯の調査の概要を述べたい。

筆者が玖珠郡を訪れたのは昭和三七年一〇月が最初であるが、昭和四九年以降は連続して訪れた。それは地元の研究者と知己を得てから調査の密度も増し、昭和五五年九月には「玖珠郡史談会」の発足をみるにいたった。玖珠郡史談会発足までの数年間は筆者とともに、古文書・金石文・城址の遺構などを見て回るとともに、夜は宿舎で討論の連続であった。その後も足しげく訪れ、玖珠郡のみならず、関連して湯布院・日田・竹田・国東・鶴崎、福岡県の八女・柳川・大牟田・三池等にもおもむき、文書調査を含む聞き取り・現地踏査を行った。歴史研究にたずさわる誰しもが経験するように、机

上で諸史料をひもときながらも、いつしかその背景・景観などいわゆる土地勘が働くようになったことを痛感した。

玖珠郡内においてはまず郡内の九重町字野上にある野上一族の墓地を訪れたことから始めて、以後豊後清原一族と、それから分出した諸家の文書調査が続いた。これらを通じて感じたことの一つは、文書所蔵家のほとんどが戦国期からの居住者であり、戦国末期大友氏滅亡後の移住事情なども明確に伝承されていること、さらに集落の状況も聞き取りによっては戦国期及びそれ以前の復元が可能ならばかりか、すでに消滅しかかっている小字以下の地名も古老の方々が明確に記憶されているなど、総体として中世の様相が色濃く残っていることである。郡内文書は、先に触れた『増補訂正編年大友史料』や『大分県史料』に収録されてはいるものの、調査体制や所蔵家の調査時点での諸事情なども関係して、近世・近代の文書、伝存事情などは必ずしも十分ではない。これらの欠を補うとともに、いくども訪れる保証はないことも考慮に入れて、調査にあたっては悉皆調査を心掛けた。なかでも伝存事情について知り得ることは文書の分析・理解にきわめて重要である。

筆者のいう悉皆調査とは、文書については所蔵家に伝存された文書であれば近世・近代に及ぶものすべてを見る、小字などの旧地名・伝承・住居・墓地・旦那寺・交通手段などの聞き取り調査も合わせて行う、これによって所蔵されている文書の背景事情を探ることであり、このような方法論はいくどとなく行われた調査過程における反省から導き出されたものである。調査というものは所蔵家の生活もあり、いくども訪れる保証はない、したがって調査に赴いた時点がすべてであるという認識にもとづいていることはいうまでもない（拙稿『西国武士団関係史料へ古文書』の収集と調査』『私学研修』第一一七号所収）。

右に見た一連の調査の中で、野上文書の調査と博搜の作業は得る所が多かった。先に触れた郡内九重町の豊後中村駅（JR久大線）ほど近くに字野上の地がある。この辺りが野上一族の旧地であることは確かであるが、野上文書の残存はほとんど見られない。『増補訂正編年大友史料』に見られる野上文書を手がかりにして、漸次その原本・文献などにあたるうちに現段階で可能な限りの野上文書を収録することができた。すなわち大分県立図書館蔵の『碩田叢誌』・前田育徳会尊経閣文庫所蔵の野上文書・東大史料編纂所所蔵の影写本、さらに財津文書調査の過程で相当数の野上文書（現伊東市

在住の財津本家・熊本在住の財津氏などの所蔵、財津家は古代以来の日田に於ける豪族大蔵氏の流れをくみ、戦国期には日田八奉行の一つであり、戦国末期以降肥後細川に仕官した系譜を持つ）を窺見することができた。とくに財津一族に伝存されているものほとんどは学界未見文書であるばかりか、先に掲げた『碩田叢誌』の編者である、近世の大分における豪商であり碩学であった後藤碩田の調査し筆写した原本などが見られることも新しい発見であった。

これらの調査を通じて、古代末期以来玖珠郡内において発展を遂げた野上氏の、中世を通じての存在形態が把握できたとともに、一族の分出と近世に於ける動向の一面を明らかにし得た（拙稿「野上文書の伝来と移動の事情について」古文書研究第一四号所収、前掲同「玖珠郡についての一考察——野上氏を中心に——」、「九重町誌」下巻に部分執筆）。

おわりに

以上において筆者の豊後大友氏を中心とする研究の歩みを披瀝した。現段階において多くの補正や整合などなすべきことは極めて多いが、その第一歩として、先述した多くの古文書史料を、『西国武士団関係史料集』として共同研究者の福川一徳氏の絶大なる協力のもとに編集・発刊中（現在二六巻まで刊行）である。その主旨は、史料の公開にあり、活字判の史料集の限界を、少しでも形状を明らかにすること。完璧を期し得ない解説の補正も写真の掲出によって後日補正できる等の配慮と、さらにこれらの文書は諸事情から年数の経過に伴って移動し時には散逸する危険性をはらんでいる。とくに散逸した場合、文書に書かれた事実そのものが消え去ってしまうのである。このような問題を食い止めるとともに、新しい問題発見とその解明の手がかりになれば幸いと考えての作業である。

稿を終るにあたり、これまでの間に受けた関係各位・諸機関の御厚情・御協力・御支援に対し、深甚の謝意を表すものである。

〔付記〕本稿は、一九九六年十二月七日（土）の法政大学史学会における講演「豊後大友氏の研究史的考察」の論旨を加筆、成稿したものである。

芥川教授の略歴

一九二六年七月二三日 福岡市荒戸町で誕生

【学歴】

一九三九年四月 私立正則中学校入学

一九四四年三月 同四年修了

一九四四年四月 駒沢大学専門部歴史科入学(現文学部歴史学科)

一九四七年三月 駒沢大学卒業

一九四七年五月 法政大学第二文学部地理歴史学科歴史専攻

(旧制)入学

一九五〇年三月 同卒業

【職歴】

一九四七年四月 私立武相中学校(旧制)教諭

一九四七年九月 同退職

一九四七年九月 私立世田谷中学(旧制・現世田谷学園中・高等

学校)教諭

一九五二年三月 同退職

一九五二年四月 法政大学第二高等学校教諭

一九五二年六月 法政大学文学部兼任助手

一九五八年三月 助手辞任

一九六七年三月 法政大学第二高等学校退職

一九六七年四月 山口工業短期大学(新設) 助教授・法政大学第

二教養部兼任講師

一九六九年三月 山口工業短期大学(新設) 助教授退職

一九六九年四月 昭和音楽短期大学助教授

一九七一年三月 同退職

一九七一年四月 法政大学第二教養部助教授

一九七三年四月 同教授

一九九〇年四月 法政大学第二教養部長・法政大学評議員(〓九

一年三月)

一九九七年三月 定年退職